日本共産党の地域新聞　発行所：日本共産党夕張市委員会　夕張市千代田２番地の１　Tel/Fax　52-3097　2016年 5月１５日(日)１５２５号 (1)

民報 ゆうばり

南空知憲法集会で若者サウンドデモ

石炭博物館友の会スタート！

明日を決めるのは私たち！若者がサウンドアピール！

「安保関連法」（「戦争法」）施行後の5月3日（憲法記念日）、全国で取り組まれた『戦争法廃止！5・3憲法集会』が、岩見沢中央公園で開催され250人が参加しました。

昨年、9月12日に開催された『総がかりで戦争法廃案へ』南空知集会と同規模の南空知集会に、夕張からも23名が参加しました。

集会では、主催者・来賓の挨拶のあと、夕張から若者が、「夕張は、昨日、署名目標1，800を達成しました。わたしも、友人から署名を集め参加しました。戦争法はなくすべきです。みなさん一緒に頑張りましょう」と元気よくあいさつしました。

今年は10代の若者とオジさんギター隊が軽トラックに乗り込み、若者のラップ調のアピールやギター演奏でのうたごえパレード、大小のプラカードも掲げられました。

今回、この南空知でも若者たちのサウンドアピールが登場し、新しい風が吹き始め、若者や市民が行動する21世紀の幕開けを感じました。

当日は晴天に恵まれ、会場での歌声と「野党は共闘！憲法を壊すな！」のプラスターを掲げる参加者の熱い思いが、強く感じられる集会となりました。

石炭博物館 友の会発足式 初代会長に矢野牧夫さん！

4月24日、石炭博物館において石炭博物館友の会発足式＆友子制度のトークセッションが開催され、約40人が参加しました。

2月に開催された石炭博物館フォーラムで友の会メンバーの募集を開始、50名を超える方たちから賛同が寄せられていると発表があり、友の会の初代会長には矢野牧夫さん（夕張の歴史と文化を学ぶ会副代表）が満場の拍手で確認されました。

トークセッションは、登川・楓で友子制度を経験した藤森さんと伊藤さん、友子制度を研究している矢野さんの三人で進められ、取り立て式のビデオも見ながら当時の生活などを語り合っていました。

★日本共産党　夕張市委員会へのご連絡・ご相談はお気軽にどうぞ～　Tel/Fax ： 0123-52-3097　e-mail：jcp.yubari@gmail.com

労働法制「改悪」の勉強会
第87回メーデー夕張集会

5月1日、第87回メーデー夕張集会が、はまなす会館で開催され、約30人が参加しました。

筒井勇治実行委員長の挨拶、日本共産党くまがい桂子市議の祝辞のあと、紙智子参議院議員、はたやま和也衆議院議員、道共産党相談室長の森つねとさんのメッセージ、鈴木直道市長・厚谷司議長・労金支店長等からのメッセージが紹介されました。

「労働法制改悪」について学習し、安倍政権の暴走を止めなければ、貧困と格差がなくならないことを確認しメーデー宣言とスローガンが採択されました。

「団結！ガンバロー！」の参加者

くずさんの夕張歴史散歩(47)

明治の終えん

一九一二年（明治45年）7月30日、明治天皇が亡くなります。明治維新以来、薩摩・長州の藩閥政治の頂点に立ち、富国強兵・殖産興国政策を持って日清日露の戦争に突っ走った明治の思想的中心が崩壊します。

同時に天皇に殉死するとして、乃木希助大将（日露戦争で大量の兵士を死なせた）が夫人の静子と自刃という、前近代的事件で幕を閉じます。

伊藤博文暗殺さる、韓国の不幸のはじまり

これに先立つ、一九〇九年（明治42年）10月26日、明治天皇の無二の重鎮で元老伊藤博文は、ハルピン駅頭で韓国の愛国者「安重根」に暗殺されます。

これを機に一気に翌明治43年、日韓条約が締結され、韓国併合・従属が始まります。以来、韓国（朝鮮）の不幸が始まります。

年号改まり庶民の生活は好転したか

時代は大正に入りますが、庶民の生活は日露戦争後の大不況に襲われます。

夕張炭鉱では、井上角五郎以下重役が経営不振で総辞職（明治43年）。

明治45年4月に第二斜坑で死者二六七名、年号が変わって12月、同じ現場でガス爆発二一六名の死亡者を出す（前号に記述）という悲しい年の暮となります。

翌年一九一三年（大正2年）正月気分の抜けない1月13日、再び第二斜坑で坑内火災が起き、五三名が死亡する災害となりました。

打ちつづく災害に、居住区では連日のように葬式がつらなり、不安と動揺が広がります。坑夫の多くはヤマを離れ、一九〇七年（明40年）に五五〇〇余名いたのが、この年（大2年）には四三〇〇余名まで減っていきました。

森つねと「かけある記」

日本共産党道国政相談室長

森　つねと

ある母の涙

いわぶち友さん（参院比例予定候補）と札幌市内で女性のつどいに参加したときのことです。若いシングルマザーの発言に会場が静まりました。

家計を助けるために高校時代から働いてきたというこの女性は、子どもを授かりますが、事情から一人で育てる決意をします。派遣会社に登録し、「日中・土日休み」の条件で仕事の紹介を待つものの、条件が合わず連絡はほとんどありませんでした。

やむを得ず、平日以外の勤務もある仕事を選択。しかも、保育園が開園する朝七時に子どもを預けて、ぎりぎり出勤時間に間に合う早朝からの勤務です。

娘さんと触れ合うことができるのは朝、晩の限られた時間だけ。さらに、保育園が休みのとき、小さな娘さんを一人にするわけにはいかず、実母に預けて働きに出ますが、そのたびに「娘のことを考えていない」と責められ、けんかに…。

そんな母親の心情を察した娘さんは、「母ちゃん、仕事しないと生きていけないものね」と言って、けなげに見送ってくれるそうです。

何より不安なのは、短期雇用でつなぐ先行きの見えない生活です。「もっと働きやすく、子育てしやすい社会になってほしい」。震える声で訴えた母親の目からは、悔し涙が流れていました。

女性や子どもが生きづらい社会に未来はありません。母親の涙を目に焼き付けて、政治の転換を訴えていきます。